29. 輪っふるファーム（農業体験）

活動分野	地域交流	活動に参加している障害者			
		障害種別	身体・知的・精神	年齢	全年齢
活動地域	埼玉県 さいたま市	実施主体 【企業】	名　称：埼玉トヨペット株式会社　はあとねっと輪っふる事務局 住　所：埼玉県さいたま市中央区上落合２－２－１ 電　話：048-859-4130　　fax：048-859-4202 URL　：http://www.h7.dion.ne.jp/~waffle/		

活動概要

さいたま市緑区さぎ山公園近くに田圃1反、畑 50 坪を借り、「輪っふるファーム」と名付け、田植え（5 月）、稲刈り（10 月）と、障害のある人もない人も、また、子どもから高齢者まで年齢を問わず誰もが参加できる農業体験を行っている。

2009 年春からは、さらに農地を広げ「輪っふるファーム」と命名。米だけでなく、じゃがいも、玉ねぎ、きゅうり、なす、大根、里芋、長ねぎ、ヤーコンなど、1 年を通じてさまざまな作物を育て、販売もしている。

活動を始めた背景・経緯

「障害があってもなくても、土いじりの楽しさを体験させたい」と考えていたところ、輪っふるが募集している福祉車両モニター制度（埼玉県在住の介護の必要な人や障害のある人に福祉車両を三ヶ月間無料で貸し出す制度）に当選した人が、農業体験の場として、2003 年に保有する田圃の一部を開放してくれたのが始まり。

2009 年からは、「埼玉県グリーン・ツーリズム推進協議会」を通じて知り合った「ファームインさぎ山」の田圃と畑を借りて、障害のある人の就業研究も見すえながら農業活動を行っている。

活動目的

障害の有無に関わらず、子どもから大人までさまざまな人たちに、農作業を共に行うことを通じて、土いじりや作物づくりの楽しさを体験してもうとともに、障害のある人とない人の幅広い交流を図る。

また、障害の有無に関わらず、誰もが分け隔てなく生活できるノーマライゼーションの実現に挑戦する。

活動の成果又は効果

田植え・稲刈りには毎年120～150名の参加者があり、障害の有無に関わらず、皆が一つの目標に向かって共に行動し協力し合う「ノーマライゼーション」の実践ができた。

障害のない人が障害のある人をサポートしたり、小さな子どもに大人が教えてあげるなど、皆で助け合い、一緒に何かを成し遂げるという達成感を得ることができた。また、みんなで時間を共有して作業をすることで、身体を動かす喜びや目には見えない心の充実感、満足感などが得られた。

車椅子の人などは「どうせ自分には無理」と思っていたものが、周囲のサポートによって可能になり、たいへん喜んでもらっている。

埼玉トヨペットの新入社員やインターンシップの学生も参加しているが、普段、障害を持つ人や高齢者と接することがほとんどないため、貴重な体験となっている。

活動を継続する上で工夫した点

- 以前は水田に段差があり、足の不自由な人は田圃に入ることが大変だった。そのため、苗の根に泥を付けて田圃に投げ入れる「投げ植え」を行っていた。
- 現在は段差がないので、ゴムボートやブルーシートを活用。これにより、車椅子の人も水田に入って所定の位置に苗を植えることができるようになった。
- 土いじりの楽しさを知ってもらうため、苗は手で植え、稲刈りは伝統的な鎌を使用。また、はせ掛け（刈り取った稲を天日干にする作業）も体験してもらっている。
- 現在は無農薬で行っているので、カエルやザリガニ、虫、鳥など、たくさんの生き物と自然の中で触れ合うことができる。子どもたちは、稲作とともに泥んこ遊び体験も楽しんでいる。
- 農作業で身体を動かしたあとは、藁で炊いたご飯や漬け物、松屋フーズグループの社員の提供による牛めしやチキンカレー、事務局の社員による手打ちうどんなどを全員で味わう。毎年、楽しみにしている参加者が多い。
- 「はあとねっと輪っふる　かわら版」を毎月発行し、活動の告知やレポートを掲載。さらなる周知に努めている。
- 運営については埼玉トヨペットが主体となるのではなく、はあとねっと輪っふると連携している協力団体の代表からなる世話人会議を月一回開催し、障害のある人たちと企業が共に考えながら活動を実施している。

活動を継続する上での課題

地域で自然と親しめる環境が少なくなっており、今後も活動していくためには実施場所の継続的な確保が課題となってくると考えられるが、これまでに築きあげてきた地域社会との関係をうまく活用しながら、今後も「食育」を通じて、食の安全や農の伝統を伝えていきたい。

共生社会実践活動として今後予定しているもの又は実施してみたいもの

・今後も引き続きいろいろな農作物を作り、障害の有無に関わらず、地域の住民としての交流を図っていきたい。また今後はさつまいもを植え、芋掘り＆焼き芋大会などのイベントが開催できたらと考えている。
・将来的には、障害のある人や定年退職者の雇用先として、農業が生かせないか思案中である。

実施体制

はあとねっと輪っふる事務局として埼玉トヨペットＣＳＲ・環境部社員 10 名
はあとねっと輪っふる世話人会7、8名
その他新入社員 20 名

キーワード

農業活動、都会と農村の交流、ノーマライゼーション

その他

・彩の国人にやさしい建物づくり関連協議会　第3回彩の国人にやさしいまちづくり賞活動部門優秀賞受賞（2006 年）
・日本福祉のまちづくり学会　第 10 回全国大会　まちづくり・ひとの輪づくりコンテスト優秀賞受賞（2007 年）
・埼玉キワニスクラブ　社会公益賞受賞（2007 年）
・平成 19 年度バリアフリー化推進功労者表彰内閣府特命担当大臣表彰優良賞受賞
・平成 20 年度埼玉県社会福祉大会　社会貢献活動実績企業大会会長表彰受賞

30. 車椅子を使用している社員による小・中学校での車椅子体験授業

活動分野	地域交流	活動に参加している障害者			
		障害種別	身体	年齢	18～64 歳
活動地域	埼玉県 さいたま市	実施主体 〔企業〕	名　称：埼玉トヨペット株式会社 はあとねっと輪っふる事務局 シニアライフ研究会 住　所：埼玉県さいたま市中央区上落合２－２－１ 電　話：048-859-4130　　fax：048-859-4202 URL　：http://www.h7.dion.ne.jp/~waffle/		

活動概要

さいたま市内の公立小･中学校の総合学習の時間に、車椅子を使用している社員や福祉車両を派遣。社員が普段使っているフレンドマチック（トヨタの身体障害者用運転補助システムの総称）取付専用車に実際に乗車してもらうほか、福祉車両のハイエースに車椅子を乗せ、リフトでの乗降体験をしてもらうなど、車いす体験や福祉車両の概要説明などを行っている。

活動を始めた背景・経緯

健康で文化的な生活を目指すシニアをバックアップすることを目的に活動している「シニアライフ研究会」のアクティブボランティアに、さいたま市社会福祉協議会が「小学校の総合学習の時間に、子どもたちに福祉教育を受けさせたい。」と協力を要請したのが始まり。シニアライフ研究会は 2003 年から輪っふる世話人会のメンバーとしてともに活動していたことから、2009 年6月より合同で実施している。2009 年は小学校2校実施し、2010 年も中学校1校で実施している。

活動目的

･車椅子や福祉車両を身近に感じ、小･中学生にバリアフリーに対する理解を深めてもらうのが狙い。
･障害のある児童は、大抵、小学校入学の段階で分け隔てられてしまうため、障害のない小学生にとって、残念ながら障害や介護は身近なものではなくなっている。そのため、実際に車椅子などを体験し、車椅子を使っている人と話をすることで「自分の住んでいる地域にはいろんな人がいる」と気づき、身体の不自由な人たちを理解する目線を持ってもらいたい。
･障害の有無に関わらず、誰もが分け隔てなく生活できるノーマライゼーションの実現に向けた挑戦。

活動の成果又は効果

2009 年に指扇小学校で6年生の児童 160 名が参加。芝川小学校では4年生の 122 人が参加。普段目にすることのない福祉車両に強い関心を示してくれた。

福祉車両の存在を知っている児童がほとんどいない中、この体験を通じて、障害のある人たちや高齢者の有効な足となって、彼らの活動の場を広げていることを実感できたようだ。

また、車椅子を操作することで「車椅子に乗った人が困っているときは手助けしたい」との声が多く聞かれ、充実した福祉教育の場となった。

活動を継続する上で工夫した点

・実際にフレンドマチック車の運転席に座って、足を使わず両手だけでハンドルやアクセル、ブレーキ操作などを体験してもらった。

・車椅子については、動かし方の指導のあと、2、3人が1組になって車椅子を押しながら障害物を避け段差を越えたり、坂道を走行してもらったりした。できるだけ少人数で実施し、体験してもらっている。

・「はあとねっと輪っふる　かわら版」を毎月発行し、活動の告知やレポートを掲載。さらなる周知に努めている。

・運営については埼玉トヨペットが主体となるのではなく、はあとねっと輪っふると連携している協力団体の代表からなる世話人会議を月一回開催し、障害のある人たちと企業が共に考えながら活動を実施している。

活動を継続する上での課題

2009 年に活動をスタートさせたばかりであり、授業を実施した学校がまだまだ少ないのが実情である。

シニアライフ研究会との連携のもと、今後も要望があれば、小・中学校に積極的に出向いて授業を実施したい。

共生社会実践活動として今後予定しているもの又は実施してみたいもの

小・中学校だけでなく、地域のセンターなどでも体験学習を行って実績を増やし、福祉車両や車椅子、そして、身体に障害のある人への地域の人たちの理解をさらに深めていきたい。

実施体制

はあとねっと輪っふる事務局として埼玉トヨペットＣＳＲ・環境部社員3名

シニアライフ研究会のボランティア 10 名

キーワード

体験学習、地域貢献、ノーマライゼーション

31．障害のある人の生活を豊かに彩るコミュニティフレンド活動

活動分野	地域交流 生活支援、権利擁護	活動に参加している障害者			
		障害種別	知的・精神・発達	年齢	18～64 歳
活動地域	千葉県	実施主体 【NPO】	名　称：NPO 法人　ＰＡＣガーディアンズ 住　所：千葉県船橋市西習志野４－24－17 電　話：047-465-9022　　fax：047-465-9022 URL　：http://pacg.jp/		

活動概要

知的障害･発達障害など判断に支援の必要な人たちを主たる対象とし、コミュニティフレンド活動を実施し普及･啓発を図っているほか、コミュニティフレンドの育成も行っている。

コミュニティフレンドとは、知的障害･発達障害などのある人（パートナー）と社会参加や余暇などを共に楽しみながら時間を共有することで、障害のある人が社会との接点を広げ、地域の人たちとの関わりを広げる手伝いをする人である。

なんの社会的義務や権利関係なしに、日常の他愛もない話をして一緒に過ごせるような人の存在は、実は人間にとってとても重要であると思われるが、障害のある人の生活で一番足りないのが、こういう人の存在である。親や福祉関係者とは違った立場から、障害のことを理解してくれる人がいれば、彼らの生活は実に豊かになる。

具体的には、月に一度程度会って、一緒に買い物へ行ったり、食事をしたり、外出が難しい場合は家で話し相手になるなど、その活動はさまざま。ペアが 10 組あれば 10 通りの過ごし方がある。

概して障害のある人の人間関係は、家族、福祉･教育関係者などに限られてしまいがちだが、コミュニティフレンド活動を通じて、“まちの中の友だち”として障害のある人の生活に彩りを与えていきたいと考えている。

実施主体であるＰＡＣガーディアンズは、もともと成年後見の利用促進と相談･支援などを目的に活動していたが、いろいろなタイプの人が混ざって、障害のある人と関わりを持ち、彼らの生活を支えるようなシステムを地域に作り上げる必要があると考え、コミュニティフレンド活動を始めた。

成年後見や生活支援は暮らしの基盤を作り、コミュニティフレンドは暮らしを豊かに彩る活動として、それぞれを個別に重要な事業と位置づけ展開している。

活動を始めた背景・経緯

2000年前後に、知的障害･発達障害のある人に対する理解とエンパワメントを進める protection and advocacy 運動が全国で行われ、千葉県でも「P＆A ちば（PAC）」として活動を開始した。

成年後見を中心に学習と活動を展開し、2005年にNPO法人PACガーディアンズとして設立･登記した。

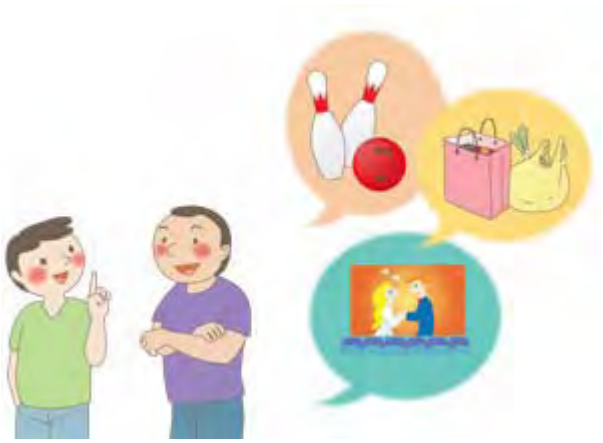
当初は、障害のある人の成年後見に関する活動を中心に行っていたが、彼らの長くかつ多様な人生を考えた場合、財産管理や契約などに関わる後見制度だけではニーズに応えられないと考えるようになった。

成年後見を基盤にしながら、「社会との接点を広げ、障害のある人の生活を一緒に作り上げていける、気軽に付き合える存在が地域に必要では」と思うようになり、コミュニティフレンドの活動をスタートさせた。

活動目的

成年後見･権利擁護支援やコミュニティフレンドといった活動を通じ、知的障害など判断に支援の必要な人々が地域で豊かに暮らせる社会の仕組みづくりに寄与することを目的としている。現行の成年後見制度には課題も多いので、より良い使い方、改正のあり方も考えている。

活動の成果又は効果



現在30組前後がペアやグループを組んで活動しており、そのほか、コミュニティフレンドになることを希望しているが待機中の人もいる。関心を持つ人が増えてきているので、養成講座を開くなどして対応に努めている。

パートナー（障害のある本人）の家族からは、「これまでヘルパーや学校の先生以外と付き合うことがなかったので、友だちができて良かった。」「生まれて初めて、友だちから電話がかかってきて、家族皆で喜んだ。」など、感謝の声が多く寄せられている。また、パートナーからも「これからもコミュニティフレンドとの関係を続けていきたい。」との声が多く寄せられている。

ペアについては、スタート当初は、同性･同世代であることが必須だと思っていたが、場合によってはそうでなくとも良い（或いは、そうでない方が良い）ことが分かってきた。「年が離れていた方が落ち着く」「（1対1では緊張するので）複数で会いたい」との意見もあり、パートナーとコミュニティフレンドの関係性が非常に多様化している。このことが分かったのも成果である。

PACガーディアンズでは、全国に先駆けてコミュニティフレンド活動を実施し、普及･啓発を図ってきたが、現在、神戸などでも同様の活動が広がりつつある。

活動を継続する上で工夫した点

・Kontaktperson（スウェーデン）、Clive Project（英国）など、海外に類似活動があるものの、コミュニティフレンド活動は国内ではオリジナルである。そのため、パートナーとコミュニティフレンドの双方に、友だちとしての関わりや楽しみ活動であることなどの姿勢を理解してもらうようにするとともに、「コーディネーター」を配置し、マッチングとフォローアップ・相談に留意している。
・コミュニティフレンド養成講座（講習会）を実施しており、概要説明や実際に活動している人たちの話を聞くほか、ワークショップなどを行っている。
・コミュニティフレンドとは契約を交わし、最低限の保険に入ってもらっている。また、ペアについては、本人同士の相性の問題もあるので、1年ごとに更新するという形を取っている。

活動を継続する上での課題

・収益を上げる事業ではないため、事業費の捻出、特に人件費の安定確保が課題である。
・活動を始めて日が浅いこともあり、コミュニティフレンドが集まりにくい。継続的に普及・啓発を図り、さらに理解を広めていくことが必要である。
・パートナーとコミュニティフレンドをつなぐコーディネーターの役割が非常に重要だと感じている。双方の希望者に対する面接、マッチングとそのための日程調整、活動上の相談に乗る以外に、講演や説明会への出席、広報、参加者の名簿管理や連絡会の開催などがあり、かなりの仕事量である。現在は非常勤2名で対応しており、コーディネートとマッチングが追いつかないことがある。2010年度には千葉県との協働事業として採用され、コミュニティフレンドの育成と広報に取り組んでいくが、それ以外に、コーディネーターの研修プログラムの開発を予定している（コーディネーターも1名増員予定）。
・現在は、PACガーディアンズからコミュニティフレンドに対し、諸費用として1回につき3000円を支払っているが、「友だちと会うのだからお金はいらない」という声や「交通費くらいは欲しい」という声など賛否様々である。しかし、もともと収入を見込める活動ではないので、将来的には支払いを制限せざるを得ないと考える。
・数年にわたって家族ぐるみの付合いをしているペアもあれば、残念ながらペアを解消したり、ペアを取り替えたケースもある。いろいろな形がある中で、先入観やにとらわれることなく、「障害のある人の地域生活を支えること」を目標に活動を進めたい。

共生社会実践活動として今後予定しているもの又は実施してみたいもの

これまでのペアを基本とする活動からグループを含めた多彩な活動となりつつある。そのため、皆で楽しむための合同イベント（音楽会など）も開催予定。加えて、神戸など他地域・他県でも同様の活動がいくつか始まっているので、これらと連携しつつ展開していきたい。

また、2010 年に千葉県との協働事業として採用されたが、他の自治体にも事業として採用してくれる所を募るなど、今後も、地道にかつ安定的に活動できる道を模索していきたい。

実施体制

役員 14 人のほか、事務局（非常勤）2 人、コミュニティフレンドコーディネーター（非常勤）2 人。

キーワード

コミュニティフレンド、生活維持、生活支援

32. 視覚障害者とボランティアの外出企画

活動分野	地域交流 生活支援	活動に参加している障害者			
		障害種別	身体	年齢	18 歳以上
活動地域	福井県越前市	実施主体 【社会福祉協議会】	名　称：越前市社会福祉協議会ボランティアセンター 住　所：福井県越前市府中1－11－2 電　話：0778-22-8500　　fax：0778-22-8866		

活動概要

青少年層（高校生から 35 歳程度まで）のボランティアを募集し、ガイドヘルプ（視覚障害を持つ方の移動介助）の講習を行った後、市内の視覚障害を持つ方たちを介助し電車に乗って福井市まで出かける。

駅周辺の散策や食事などの介助を行い、交流を深めながら、障害への理解を深める。福井駅周辺は再開発が進んでおり、環境が変化し続けているため、視覚障害を持つ方にとっては記憶と違うところが多く、それらの状況を分かりやすく伝えることも重視している。

活動を始めた背景・経緯

福祉に限ったことではないが、若い世代がボランティアを行うことに対する期待は大きく、また、需要もあるが、実際には、なかなかなり手となる人が集まらないという状況があった。この問題を少しでも改善するために、実際に障害を持つ方とのふれあいを通しながら、ボランティア活動の意義や魅力を感じてもらい、今後の継続的な活動につなげていくため視覚障害を持つ方との交流を始めた。

活動目的

視覚障害を持つ方の行動範囲を広げることと共にボランティアとの交流を深めることを目的とする。

ボランティアは実際に介助する中で、目が見えない状況でできること、できないことを実感し、視覚障害への理解を深めることを目指す。

活動の成果又は効果

初めてガイドヘルプに挑戦するボランティアがほとんどで、最初は不安や戸惑いが見られたが、時間の経過と共に少しずつ緊張もほぐれていき笑顔が見られるようになった。

障害を持つ方も普段とは違うパートナーということで気を張っていたが、新しい情報や感性と出会うことができ新鮮な気持ちで楽しんでいた。

活動を継続する上で工夫した点

ボランティアは実際に障害を持つ方の介助を行うなど、できるだけ生の体験をとおしながら、身体で実感するような企画を行った。相手の方の笑顔や「ありがとう」という声かけにより感動を味わえるような場面を多くつくれるように工夫した。

活動を継続する上での課題

青少年層は学校や仕事などでボランティアにかけられる時間が限られるため、いかに魅力的な内容で、自分から行きたくなる活動かがポイントになる。そのためにも周囲の人からのねぎらいや感謝の言葉などの配慮が重要となる。

共生社会実践活動として今後予定しているもの又は実施してみたいもの

障害のある児童とのふれあい。

実施体制

担当職員1名。青少年ボランティアサークル「アライブ」と連携し開催。

キーワード

青少年、実体験、感動